

3 実践

地域の人材活用＜国語＞

（１）地域のコミュニティと関わる人材活用の可能性

①短歌（２年生）、俳句（３年生）の学習

- ア 四谷ロータリークラブの方を講師に招き短歌、俳句の実作についての説明を受ける。
- イ 生徒が作った歌、句を講評していただく。
- ウ 四谷ロータリークラブの俳句コンクールに参加。

②書写の学習（全学年）

- ア 書き初めの席書会を体育館で行う。地域の方に講師として来校していただき書写の指導の補助をしていただく。

（２）コミュニティ・スクールとしての教科の視点

四谷ロータリークラブの俳句コンクールには数年前より毎年参加している。現在は国語の授業の中で作った俳句を出品するだけにとどまっているが、それを一歩進めた形として、上記のようなことが可能ではないかと考えられる。

また、（３）で詳細について述べるが、コミュニティスクールを進めていく際の基本的な能力を習得するために、国語科の指導を位置付けることができるのではないだろうか。

（３）講師の助言、指導内容

高木清文先生（元全日中会長）

コミュニティ・スクールの前提条件として必要なことは、地域の声を常に聞く姿勢をもつことであり、教科書の教材で地域との関わりがもてそうなものがあれば関連付けることから始めてはどうかという御助言を頂きました。

また、指導における基本的な姿勢としては、簡単で長続きするものを選ぶことと、生徒が自由な発想で主体的に取り組んでいくことを選んでいくことが大切であるということを念頭に置いて、指導にあたっていくのがよい。そして、「伝え合う力」を育てることが国語科としては肝要であり、生徒に目的意識をもたせるようにしなければならないという助言があった。

「情報は人に伝えることに意味がある」ので、（誰に、何のためにそれを伝えるのかということ）を明らかにさせたうえで、繰り返し指導をしていくことが、「伝え合う力」の定着につながるということである。

具体的な例としては、四谷学の時間に必要な基礎的な力を身につけることが国語科として必要なことであり、そのためには、①レポートの書き方、説明文の書き方の練習、②言葉遣い、会話の方法、挨拶の仕方、③お礼状の書き方、等について実践しながら学習していくことが必要なのではないかというところまで話が進んだ。

地域の人材活用＜社会＞

（１）地域のコミュニティーと関わる人材活用の可能性

新宿歴史博物館の学芸員との連携

近藤さん：ご自身は本年１１月から勤務されており、高齢者向けの生涯学習に携わっている。高等学校での教職指導の経験もあり、今後も研究授業への参加や、生徒支援にあたってくださいとのこと。

後藤さん：小学校６年生向けの縄文文化の冊子作成に関与した。小学校３年生向けの「昔を探そう」の指導経験有り。中学生にもこの冊子を利用してもらいたいとのこと。また、中学生にも利用してもらえる歴史博物館を目指している。地域の中で利用してもらえる博物館づくりをしたいとのこと。

今後は、上記の方々と連携を図りつつ、文化発信ができる授業を行う。また、地域を歩くことによって、昔のその界限に興味がわくものである。このように、地域の博物館学芸員の方や地域の郷土歴史にかかわる方々と多くのコミュニケーションをとり、地域の方々の人材活用にあたりたい。

（２）コミュニティ・スクールとしての教科の視点

社会科ほどコミュニティ・スクール構想の中に積極的に参加できる教科はないと思われる。地域の歴史や郷土への郷愁などの面から、地域の方々から多くのお力を借りられる。また、地理分野においても人工衛星からの画像や航空写真なども活用して新宿や四谷の地理への興味、関心を喚起していきたい。

（３）講師の指導、助言

高山博之先生（元京都教育大学教授、元日本女子大学教授）

内藤新宿が開かれた頃から、四谷の地域も栄えたようである。江戸城の外堀は開城当時はなく、谷地に流れていた小さな河川に堰をつくり、後から作られ完成していったものである。この四谷近辺は雑木林や湿原の原野の中に一本の細い道が通じていたと言われている。このように歴史観から見ても地域と中学校社会科の学習は密接に結びつくものである。

社会科で郷土について学習する場合は、３，４年の地域学習、中学校では地理的分野の「身近な地域」、歴史的分野の「身近な地域の歴史」がある。ここでは、地域の社会的機能や地理的事象、歴史的事象が部分的に扱われるが、郷土そのものを総合的に考察したり、郷土の課題を捉え、自分と繋げて考えることで、共同体の一員としての意思決定、態度形成をするといった目的概念としての地域学習であってほしい。

自由研究や総合的な学習を使って子どもたちに取り組みさせる方法もあるし、郷土を大切にすることから「公」の心の育成、地域に根付いた伝統、文化の理解を進めたい。そして、子どもが地域への意識を高め、地域に参加がうながされるような学習であってほしい。

地域の人材活用＜数学＞

（１）地域のコミュニティと関わる人材活用の可能性

地域からの要望を聞く。小さい意見をヒントにどうもっていくか？何ができるのかを考える。

小中連携教育のボランティアの学生は、地域の大学の学生である。早稲田大学、東京理科大学という生徒にとっては、身近な学生に、大学で学ぶ中で中学生に伝えられること、数学のおもしろさ、学び方などを伝えてもらう。

小中連携教育で地域の小学校と中学校が繋がりを強くすることにより、数学教育のカリキュラムの問題、内容、考える背景についてより、地域や生徒にあったものにする。

（２）教科の視点

数学に関心をもたせるために、身近な題材を扱ったり、身近な人材を利用することは、効果があると思われる。古来の文化との関わり合い（算学、塵劫記などの利用）日本の文化の中での数学という点に目を向けて興味関心をもたせることもできる。特に四谷学とのかねあいの中で、地域を理解していくことに数学を利用することができると思われる。数学を利用することによって、関係を一般化することができる。

（３）具体例

身の回りの敷地面積や緑地の面積を求める。数量の感覚を、実感する。縮図で実際に測れない大きさを求める。写真を撮り、どこから取ったのかを考えたり、どうしたらそれがわかるのかについて考える。昔の地形と今の地形を比較する。人口の推移を見て今後を予想する。

（４）講師の助言、指導内容

半田 進先生（元山口大学教授、元弘前大学教授）

学習指導要領の変更により、言語と体験重視、理数教育の重視が求められている。日本の学生は、数学は大事だと思っているのだが、興味、関心が低いという調査結果が出ている。教材を生きたものにすること、地域に根ざしたものにすることが興味、関心を深めることにつながるのではないか。そのため、身近な話題を扱ったり、地域の人に参加したりするようなものが有効であると考えられる。数や量の感覚を数字の上だけでなく、実感させる。ただし体験や、地域に根ざすといっても場面の面白さだけで終わらせないことが大切である。はじめは、領域を絞ったほうがやりやすい。教材はあちこちにあるのでわれわれは、日々数学の目で物事を見ていくことが大切である。

地域の人材活用＜理科＞

（１）地域のコミュニティと関わる人材活用の可能性

①雪印食品（動物のからだのしくみ、中２）

乳酸菌 消化の学習に活用（１回）

例）ヨーグルトの効果、作り方、効能

菌のはなし、培養法、バイオテクノロジー

特定の効能をもった菌の活用、ピロリ菌に対して拮抗作用がある。

食品としての乳酸菌、L E 2 1、講演の後、製品の試食会を実施した。

②日立電気による電子顕微鏡を用いた講習会（毎年実施５年連続）（顕微鏡を用いた学習、全学年）

生徒の持って行ったサンプルで標本を作製して観察した。

花園小学校と連携して実施、日立電気は地域に密着した地域貢献と四谷中学校のみに毎年実施している。

③環境教育１ サケの飼育と放流（動物の発生、環境教育、中３）

福島県木戸川漁業協同組合と東京電力および地域の青少年育成会による共同実施
教員の引率に対して、地域の保護者や青少年育成も協力。

東京電力新宿支社は現地までの交通手段のバスの提供や参加生徒の保険で貢献。

④環境教育２ オオムラサキの飼育羽化（昆虫のからだのつくり、環境教育、中２、中３）

地域の造園業者からのオオムラサキの幼虫と食草エノキの提供

幼虫から蛹に変化していく様子を食草のエノキごと提供していただき、中庭に
植栽。

⑤東京電力のエネルギー教室（電流のはたらきとその活用、中２）

中学校３年生の電流のはたらきの授業全般に活用、模型を用いた講演により安全
教育面でも活用。

（２）コミュニティ・スクールとしての教科の視点

継続している授業についてはすでに定着している。人材活用のルートがすでにでき
ている内容が多いが、今後さらにそれらを活用することが可能である。単発的な内容
に関しては、継続的に実施してもらえるように、さらにお願ひしていきたい。

実際に、自然教材や電気など地域の施設や会社が理科の実践教育に貢献してくれて
いる。

（３）具体例

①雪印食品、②日立電気による電子顕微鏡を用いた講習会、③環境教育１ サケの飼
育と放流、④環境教育２ オオムラサキの飼育羽化、⑤東京電力のエネルギー教室
など５項目でかつて実践してきたので、今後も連携をとって実践教育の中に取り入れ
ていく。

（４）講師の助言、指導内容

鈴木一男先生（東京都教職員研修センター教授）

地域との連携に関する授業では、実生活に根ざした内容を扱い知識、理解の定着を
図るとよい。中学校教育を通じての内容面・能力面での系統性を重視する必要がある。
また、必ずしも、体験的な学習でなくとも、近くに授業実践のフィールドがない場合
やその時間が確保出来ない場合は写真、動画、実物を見せるなどメディアミックスを
考え、バーチャル化したもので説明してもよい。それらの学習用材の利用のしかたを
考えて活用すること。あわせて、あせらずに地域の方々や専門家と内容をよく吟味し
て、十分準備して実践する。

地域の人材活用＜音楽＞

（１）音楽科の目標

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、豊かな情操を養う。

（２）４つの柱

- ①イメージしよう ②音楽のしくみ
- ③音楽とくらし ④表現を求めて

（３）地域のコミュニティと関わる人材活用の可能性

A 表現（学年共通）

＜イメージしよう＞

ア 歌唱・・・地域に在住の声楽家による指導を基に、曲種に応じた声の出し方を実際に聴くことで、各種音楽の表現の仕方を探る。

＜音楽とくらし＞

イ 器楽・・・各学年において、生活の中にある日本伝統音楽の箏や三味線・三線等の表現するための技術指導やアンサンブル指導。

B 鑑賞（学年共通）

＜表現を求めて＞

ウ 合唱・・・地域及び本校施設を活用しているにある混声合唱団の演奏を、本校合唱コンクールのゲストとした演奏をとおして、各パートの声の出し方や響き方を学習する。

（４）コミュニティースクールとしての教科の視点

表現に必要な知識やスキルを、様々なスタイルで音楽を楽しむ人々との交流を通して音楽に対する感性を豊かにし、そこで抱く興味・関心から生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てることにつながる実践教育の場となりうると思われる。

（５）実践例

- ①ユーフォニック合唱団の合唱コンでの演奏 ②弦楽四重奏の演奏会
- ③ヴィオラニストをゲストティーチャーとした講演会形式による
- ④芸団協からの技術指導員派遣 等

（６）講師の助言、指導内容

水野真里子先生（江東区松江第二中学校校長）

地域に根ざした学校として、地域にすむ人々との交流については、形式だけにとらわれることなく、地域の特色を十分に理解した上で進めていくことが寛容である。地域に住む生徒達にとって、地域の人々との音楽を通して触れ合うことは重要なことであり、地域に根ざした学校として将来にわたり長い時間協力し合える内容や質の取り組みが大切である。その点を地域の人々に理解して頂き、双方で取り組みを恵贈区することが音楽的な教育環境を構築する上で必要な人材活用であると思う。

地域の人材活用＜美術＞

授業時数が少ない美術科であるが、地域の中で美術教育の一端を見てもらい、美術の重要性を少しでもアピールしていきたい。現在、実施していることを報告したい。

（１）ポスターコンクール応募

A. 平和のポスター

新宿区が平和教育の推進をはかるために、区内の小・中学校に募集している。内容は「ふるさと新宿」を大切に思うもの、「家族・親子の絆の大切さ」を訴えるもの、「戦争反対」を訴えるものなどである。応募枚数に規定があるので、上限いっぱいの30枚のポスターを本年度は応募した。力作も多く最優秀賞2点など、9点が表彰を受けた。これらの入賞作品は7月末、新宿歴史博物館に展示され、区民の皆様に見ていただいた。

B. 明るい選挙啓発ポスター

選挙管理委員会の主催するコンクールである。全国の小・中学生に明るい選挙を推し進めるためにイメージ豊かなポスターを募集している。このコンクールにも、希望者を募り、30枚ほど応募した。新宿区で何点か入選して、新宿区役所本庁舎ロビーや西武新宿駅前ギャラリーで展示され、地域の方に見ていただくことができた。

(残念ながら、東京都の段階では入賞できなかった。)

（２）四谷区民センターでの展示

四谷区民センターの一階ギャラリーでは、四谷地区の小・中学生の作品を継続して展示をしている。四谷中の美術科も依頼を受けて、9月に2年生の水彩画(模写)を展示した。センターにいらした地域の方々が熱心に見てくださったとの報告を受けた。

（３）陶芸教室

新宿こども居場所運営協議会・四谷中学校地区居場所事業協議会の主催・四谷中PTAの共催で陶芸教室を3年来、実施している。スクールコーディネーターの尽力もあり、本年も元四谷第四小学校の鈴石先生を講師にむかえ今年も1月に実施した。テーマは手作りの抹茶碗を作ろうであった。

四谷中の1,2年生・PTAが参加して、楽しく制作した。制作した茶碗を使って3月にお茶会を予定している。

（４）講師の助言・指導内容

遠藤友麗先生(聖徳大学教授・女子美術大学大学院客員教授)

これからの図画工作・美術教育で重視すべきことに関して、5つの視点でお話を伺った。その中でコミュニティスクールの構想と特に関係があるのは、日々の実生活で具体的に生きて働く確かな表現力の育成と他者との共同による美の創作活動である。

この点で御教示いただいたことを今後の活動に生かしていきたい。

地域の人材活用＜保健体育＞

コミュニティ・スクールに向けて、保健体育科における地域の人材活用と地域の教材化

（１）教科における地域の人材活用と地域の教材化をどのように図るか

ア 教科指導・・・生徒の体力の低下をどのように上げていくか

イ 四谷中学校生徒の実態を把握する。体力測定等の活用

①入学時の生徒を、一人一人の実態を把握する

②個々の生徒の状況から、３年間を見通した指導計画・到達目標を立てる。

③個人の到達目標の設定は、個人差を授業の実践の中でどのように対応し、活かし、伸ばすことが出来るか

④「体育科による評価の基準」と「個人の到達目標」をどのように関連つけるか

⑤資料のプリントなど単元別に作成し、授業ごと個人で確認する。

（２）保健体育科における、地域の教育力の活用

ア 運動会・・・各学年ごとの参加種目による練習と生徒の志気を高めながら体力を向上させる。特に３学年による、「ムカデ競争」は、男女

一緒になり競うため、運動会のよびものの一つになっている。

イ 保健の授業・・・救急処置の基礎的な知識を学び。レインボータイムでの講習を受け実践を学び、そのあと保健の授業で復習・確認をする。

ウ レインボー・・・四谷消防署の方に救助訓練を学ぶ

１・２学年・・・「地震時に安全に身を守る方法」・「消化器の使い方」・「部屋が煙に包まれた中で逃げる方法」・「救急の時の、消防署・警察への電話のかけ方」

３ 学 年・・・意識のない人への対応・人命救助の方法、人形を使って「人工呼吸蘇生法」の訓練

（３）部活動へのコーチの導入

バレーボール部、卓球部のコーチを地域の方に依頼

（４）地域の教育力（人材）の活用

①活用のねらいを明確にして、学校がイニシアティブをとり、頼みっぱなしにしない。

特に授業・部活動への導入については、じゅうぶんに打ち合わせをし、その後は必ず評価・反省を行う。

②教師が出来ることや、やらなくてはいけないことを代わりにお願いするのではなく、あくまでも「専門性を活かした活用」を行う。

③学期ごと、月ごとなどあらかじめ決めておき、計画や指導内容を生徒の実態をみなおす。

地域の人材活用＜技術・家庭科＞

（１）地域のコミュニティーと関わる人材活用の可能性

- ①消費者センター・銀行…家庭分野の消費生活領域での活用
- ②地域の調理師の方…家庭分野の食物領域の調理実習での活用
- ③保育士の方…家庭分野の保育領域での活用
- ④食品メーカーの食育推進企業…家庭分野の食物領域と消費生活領域での活用

（２）コミュニティ・スクールとしての教科の視点

産業や家庭生活に関係する内容が多い教科なので授業内容も実技が中心であるが、学校設備等の関係で現実社会のレベルは不可能である。そこで、ハイレベルの物を見せたり体験させることができれば学習効果は非常に高まると考えられる。しかし、地域の人材活用には非常に魅力を感じるが、限られた教科の時間数の中である程度の回数を実施することは困難である。現状では領域の学習開始時の動機付けや最後の発展的な部分へつなぐところ、設備等が不足している場合の活用が精一杯である。今後は短時間で高い効果を上げる方法等を考え、少しずつ内容と実施時間を拡大していく必要がある。

（３）具体例

- ①地域の保育園での実習…【保育領域】３つの保育園にて３時間の保育体験学習を実施している。
- ②モスバーガーとの授業…【食物領域】広報担当の方・モスの管理栄養士の方との授業を実施している。（よい食事と健康について）

（４）講師の助言、指導内容

長南裕志先生（調布市立第六中学校長）

調布での実践から授業の中での地域人材活用により①地域の職人さんを招いたり、職場に見学に行くことにより本物の技術に触れさせることができた。②生徒の生活体験が不足しており、それを補うことができた。③学習のまとめりと定期的に訪問してもらうことで、学習内容の定着に役だった。などの効果があった。

授業の中で、地域の人材をどうタイムリーに導入していくかがポイントになる。生徒に身につけさせる力を補うための補助として、地域人材活用を考えないと失敗する可能性がある。そのためには事前に授業計画の中で何が足りないのどう補強するか、その方策として専門的な人材の活用を計画していき、実践し改善方法とともに検討する積み重ねが何より重要である。つまり四谷中学校だからできることを是非実践し、継続してほしい。

地域での具体的な人材の選定や活用方法については多方面に配慮する必要がある。例えば、学校の先生からあの人には声がかかったけれど、わたしには無いのか等の感情的な不満が出やすいので、生徒が連絡をする方法や教育ボランティアから依頼する等のが後々の展開に影響した例があり、調布第六中学校の場合は教育ボランティアのPTAや退職した人が、職場体験などの手配を一手に引き受けてくれている。

更に、ゲストティーチャーによる学習の評価を聞くことで、違った立場での学習観などが発見できることも教師にとっては大きな効果があるだろう。必要とする人材が地域に見つからない場合は、区役所の商工会や教職員研修センターに問い合わせることで、地域以外でも数多くの人材や団体を紹介してくれるので利用するとよい。

地域の人材活用＜英語＞

本校の英語科における課題は、第一に基礎的・基本的学習事項の定着、第二に言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションしようとする態度の育成にある。

この課題に対し、少人数制授業による指導方法の改善や、ALTとのチームティーチングにより、コミュニケーション力な言語力の育成に努めてきた。今後はこれらの工夫に加え、地域の教育力や人材を生かした授業改善が有効であると考え、検討した。

（１）地域のコミュニティと関わる人材活用の可能性

四谷地域の住民や新宿区内及び近隣には、英語教育に関心をもつ方や様々な国籍をもつ方が居住されており、その方々が授業の補助や英語部の指導などに関わることは、生徒にとって英語を学ぶよい機会であり、コミュニケーションをとる上で英語の有用性を実感するよい機会である。また、区内の大学の協力による学生ボランティアは、英語の授業に限らず、夏休み中の補充教室や質問教室等、様々な場面で活動しており、今後いっそう活発な交流が期待できる。スクールコーディネーターの援助を受け、可能性を探っていききたい。

（２）コミュニティ・スクールとしての教科の視点

英語科の学習によって身に付くコミュニケーション能力は、進路を考え、生き方を考えていく上でも重要なものとする。同じ区内の大学生が指導に関わることは、生徒が将来を考えるための具体的な目標が身近にあるともいえる。また、地域に住むいろいろな国々の方との交流は、生徒が、自分たちの地域に存在する様々な文化や価値観に触れ、自分の住む地域を英語を通して見直す機会ともなる。また、地域の広く国際的に活動している方による授業は、生徒に英語を学ぶ意欲を高めるために有効であると考えられる。

（３）具体例

- ① 17年度より、新宿区内の大学の学生が英語の授業に参加している。17年度は、1名週1回であった。放課後のクラブ活動にも参加して、英語部の生徒と関わり、英語劇の原稿づくりや指導に携わった。18年度は、2名で週1回、2時間、少人数授業の個人指導に当たってもらった。3名とも今後も英語教育に関わりたいという希望をもち、意欲的に取り組んだ。1年間ではなく、継続して生徒たちに関わってもらえると、よりよい結果が期待できる。
- ② 国際理解教育の一環として、四谷地域や新宿区に住むいろいろな国の人々との交流をとおして、各国の文化等について学習した。また、総合的な学習の時間にいろいろな国の方を講師として招き、話し合い活動等をとおして生徒の視野を広げることができた。

今後もこのような積極的な関わりを生かし、本校の英語教育を進めていきたい。

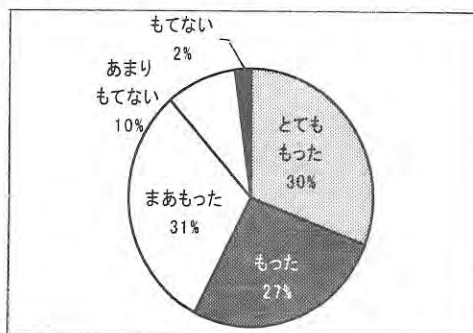
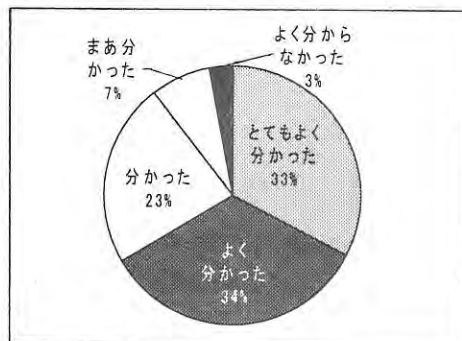
（４）講師の助言、指導内容

本庄文男先生（足立区立谷中中学校校長）

地域との連携に関する授業については、地域を知るという視点で意見交換をした。手始めに、学校内の案内図を英語で作し、次に学校の周り、次に四ツ谷の地域をとという順番で範囲を広げていってはどうかという助言をいただいた。1年生は現在のこと、2年生は過去と未来を含み、3年生は過去、現在、過去から現在に至ることまで表現できるようになる。身の回りのことを、つまり地域に興味をもち、英語で表現する機会がもてれば、生徒たちの英語力が付いていくはずである。

5. 生徒の感想 ～講演後のまとめより（108名に実施）～

①四谷のことがよく分かりましたか？ ②自分たちが住む地域に誇りがもてましたか？



③お話で一番印象に残ったことは？

- | | |
|----------------------|----------------------------|
| 1 番 四谷と四ッ谷の違い | 2 番 玉川上水ができるまでと玉川兄弟・石工さんたち |
| 3 番 玉川上水と酒屋さんや四ッ谷の人々 | 4 番 玉川上水を利用した鉛筆づくり |
| 5 番 三大名水のこと | 6 番 地名には意味があること |
| 7 番 徳川家の城の守りと寺町 | 8 番 服部半蔵と半蔵門 |
| 9 番 竹の子のこと | 10 番 井戸のこと |

④お話を伺った感想

- | | |
|-----------------------------------|------|
| ・今まで知らなかったことがいろいろ分かってよかった。 | 23名 |
| ・四谷のことがしっかり聞けてよかった。 | 18名 |
| ・お話が楽しかった。 | 12名 |
| ・四谷という身近な地域の江戸時代の話は面白かった。 | 10名 |
| ・すごくお話が分かりやすく、とても勉強になった。 | 9名 |
| ・四谷の昔と昔の人の温かさが分かった。 | 7名 |
| ・玉川上水の話は特に詳しくてよく分かった。 | 5名 |
| ・四谷のことが好きになり、誇りがもてた。 | 5名 |
| ・四谷に興味もてた。 | 4名 |
| ・昔のことをスラスラ話していらして、すごいと思った。 | 4名 |
| ・鉛筆とみつびしのマークの話が印象に残った。 | 3名 |
| ・もっと区切ってゆっくりお話ししてもらいたかった。 | 3名 |
| ・これからも歴史に残る地名をこれからも残して行きたい。 | 各 1名 |
| ・すごい。・次回があったら、もっと詳しく深く聞きたい。 | |
| ・四谷に江戸が残っていた。・自分も大人になったら、伝えて行きたい。 | |

6. まとめ

「東京に残る江戸を探す」の総まとめとして、四谷の歴史に詳しい坂部さんに講演していただいた。生徒は、江戸時代の学習が単に知識のみに留まらず身近なものに感じられた。また、地域の方から学ぶことで、地域の中で生き成長していく自分を意識させることもできたのではないかなと思う。人と人とのかわり方が薄れつつある中で地域の人材を活用することは、人とのかわり方を学ぶ場にもなると思う。



坂部氏による講演会

地域の人材活用〈第二学年総合〉

職場体験学習

(1) 職場体験学習を取り入れた経緯

四谷中では、開校以来より第一学年次に、総合的な学習の時間の中で職場体験学習に取り組んできた。今年度、コミュニティ・スクールの研究に取り組むこととなり、総合的な学習の時間の再編成を行い、今までは二年次は福祉体験を行っていたが、職場体験学習を二学年へと位置付けることとなった。よって、平成18年度の二年生は、二年連続で職場体験学習を行うこととなった。そのためか、一年次の時以上に、中身の濃い取り組みができた。

(2) 職場体験学習への取り組み

①体験先：飲食業（4軒）・販売（2軒）・製造（1軒）・修理業（1軒）・

美容師（1軒）・トリマー（4軒）・配達業（1軒）・不動産業（1軒）・

薬剤師（1軒）・保育（1軒）・福祉（3軒）・公共機関（5軒）

・受け入れ先は多く、生徒の希望がなかったために今回は見送ったところも多い。

②体験実施日：7月24日（月）～28日（金）の間で、受け入れ可能な日数・時間をお願いした。

③日程

5月 受け入れ依頼

6月上旬 体験先希望→体験先決定

6月中旬 体験先への手紙（質問状も）作成・送付

6月下旬 体験先への行き方の確認・打ち合わせ日決定（生徒より電話）

7月中旬 事前打ち合わせ

7月24日～28日 職場体験学習

8月 お礼状送付

8月下旬 体験報告書提出

本来ならば、体験学習発表会を開くところであるが、今回は2回目の体験学習ということで、発表会は行わなかった。



(3) 生徒の感想



- ・とても楽しかった。
- ・お客様の笑顔を見ることができて嬉しかった。
- ・優しく接してくれて嬉しかった。
- ・仕事の大変さや喜びが分かってよかった。
- ・担当の方がすごく優しくかった。
- ・将来、保育士になりたい。
- ・緊張したけど、しっかりやれた。
- ・親が仕事でどれだけ大変な思いをしているかが分かった。(感謝)

(4) 職場体験学習の成果と課題

職場体験学習を行うことで、生徒たちの職業観が大きく変化した。今までは、「人は、なぜ働くのでしょうか?」と質問すると、多くの生徒が、「お金のため」と、答えていた。しかし、職場体験学習後に、同じ質問をすると、多くの生徒が、「お客様の笑顔のため」と、答えた。

こう考える生徒が増えた最大の理由は、生徒たちがその職場の方々に「働いていて一番嬉しいと思うときはどんなときですか。」といった質問を、あらかじめ手紙と一緒に送っておき、体験時にその答えをいただいたことである。また、実際に職場に立ち、お客様とふれあう中で、その答えを実感した生徒もたくさんいた。将来の進路を考えると、この経験が大きく影響することは間違いないと思われる。

また、体験先の多くの方が、生徒もしくは卒業生の保護者であり、子どもたちを大切に考え、とても温かく迎えてくれたのも、生徒たちにとっては貴重な体験だったと思います。

他人とふれあうことが難しい時代になっている今こそ、こういった体験をさせていきたい。

今回、出来れば五日間程度体験させたいと考えていたのだが、業種によっては、一日だけしか体験できないところもあった。今後、さらに体験先を増やし、体験日数も増やしていきたいと考えている。



地域の人材活用〈第三学年総合〉

3 学年総合的学習の時間の共通テーマ「伝統文化と生きがい」

(1) 活動内容

- ①伝統的な日本文化を多く残す、京都奈良の文化について調査し現地で検証する。
- ②地域の著名人に仕事や生き方の話を聞くことを通して、自己の生き方を探る。
- ③課題学習をしてきたものを冊子等でまとめ、校内作品展示会で発表する。
- ④食材をおおよそその栄養バランスを考えて組み立てることを通して、自立した食生活を営むことを目指す。

(2) 年間スケジュールの概要

1 学期・伝統文化についての調査と報告書（修学旅行ノート）の作成「社会科との協力」

- ・生き方体験学習として半日の保育園実習、食を考える弁当献立作り

2 学期・生きがいについての調査学習

（5 回の仕事関係のビデオ鑑賞）

- ・著名人の生き方に学ぶ（講演会 3 回）
- ・生き方体験学習として食育セミナー
（一流ホテルの中華料理シェフ 10 人）

3 学期・著名人の生き方に学ぶ（講演会 1 回）

- ・生き方学習の総まとめ（冊子作成）



(3) 著名人の生き方に学ぶ講演会概要

- ・目的 各仕事分野での一流の人（4 人）にきていただき、仕事を通した「生きがい」について学習する機会とする。
- ・内容構成 基本的には 4 時間を 1 単位として構成し、4 単位実施した。
 - 1 時間目 事前学習（その仕事に対する学習資料を読み、質問内容を考え、班ごとに質問事項を 1～2 程度まとめる。）
 - 2 時間目 講演会前半（講和：仕事内容やそれを通しての「生き方」）
 - 3 時間目 講演会後半（質疑応答：生徒の質問に答えてもらう。）
 - 4 時間目 まとめ（講演会の中から学んだこと新たな発見等をまとめる。講師の先生へのお礼状を班ごと 1 枚書かせる。）

・企画の進め方

事前に講演内容等の希望を生徒からアンケートでまとめておき、その中から希望の多いジャンルから講演者を考える。具体的な講演者の人選等はスクールコーディネーターに協力を要請。講演者一人について何回かの協議を経て、講演内容等をすり合わせる。会場等の手配は担当教師で行い、司会は 1 回目は担当教師が行い、2 回目より生徒が実行する。

- ・具体的講演予定（事前に生徒から講演希望者を聞いてまとめておき、スクールコーディネーターと打ち合わせして、新宿在住の著名人を紹介していただいた。

① 第1回	11月16日(木)	一級建築士	望陀 宣夫氏
② 第2回	12月14日(木)	読売巨人軍コーチ	篠塚 和典氏
③ 第3回	1月16日(火)	元朝日新聞記者	森 治郎氏
④ 第4回	1月30日(火)	東京音大元学長	兎 東 俊之氏



・最終まとめ方法

4回の講演会ごとのまとめ用紙を参考にしながら、自分の進路を考え、自分の仕事に対する「生きがい」「生き方」を整理する。それを冊子にしてまとめる。

(4) 講演会の例(第4回目 ビオラ奏者との対話)

① 第4回総合講演会概要(講師 東京音楽大学教授 兎 東 俊之 先生)

前半約40分くらい演奏家を中心とした音楽関係の仕事内容についての講話と、更に本校3年の吹奏楽部員のキーボードとのアンサンブルを披露していただき、後半の30分は各班からの質問に熱心に答えてくださいました。最後に2時間同席いただいた教育長先生から今回の取り組みの感想を伺うことができました。



【生徒とのアンサンブルを披露】

② 生徒のまとめ用紙の感想の一部

- ・音楽は好きでも一人前の演奏家になるには相当な努力が必要で、音楽業界は表へでる競争が激しいのだということがわかった。「人生は短し、芸術は長し」といったベートーベンのように、人生はあっという間に終わってしまうが、音楽はずっと続いていくものだから、芸術というものを味わうのは素晴らしい。だから演奏というものは魅力があり、やめられないのだと思った。
- ・ヴィオラを演奏することが生きがいそのもの、ヴィオラをここまで思っている人にあったのははじめて。
- ・「自分というものを作り上げる」というところがよいなと思った。
- ・音楽をすること、音楽の戯れ、音にふれること、そして好きなものに対してとことんこだわるところがすごいと感じた。
- ・歴史に残る作品を自分たちの世代でないがしろにしてはいけないと思い、その作品を自分が演奏できることが素晴らしく生きがいを感じるのだと思う。また、失敗したときやめようと思った気持や成功したときのかけがえのない喜びを味わうことも生きがいになっているのだと感じた。
- ・先生の話から自分の好きなことを続けていることが楽しいと思えることが「いきがい」ではないか、人に迷惑をかけずに自分の好きなことを極めていきたいと思った。

平成18年度の研究のまとめ

平成18年度、私たち教職員一同は、「都市型地域コミュニティ構築に向けての学校のあり方」ーサブテーマ：新宿区が推進する都市型コミュニティの構築に向けて」という課題設定で様々な工夫に取り込み、生徒の活動に主眼をおいた、生徒の目から見、感じ取るような具体的な学校改善に取り組んでまいりました。

特に本年度は各教科や学年を軸に四谷中学校のコミュニティースクール化を意識し、その目的を指向した授業改善に取り組んだところに特長があります。研究授業の機会には、教育界の様々な方面で活躍されている著名な講師の先生方を招聘して、実践的な研究授業に取り組みました。、7月から翌年1月にかけて英語、理科、数学、社会、国語の5教科で、四谷地域のコミュニティ化を視野に入れた授業改善を推進したのです。どの研究授業教科でも、授業後、全教科教員の参加によるディスカッション、つまり聴衆参加型の熱心な討論会が開かれ、活発な意見交換がなされました。

その討論会を受けて専門的なお立場からの講師の先生方のご講演をいただきました。そのご指摘、ご指導内容の詳細は研究授業後の研究協議会のページをご覧ください。この研究協議会においての大きな成果は、学習者である教員サイドから発せられた質問事項を中心に、講師の先生方とともに共有した積極的な授業改善の糸口が模索されたことにあります。生徒諸君の自ら学ぶ意欲を喚起し、生徒の自主性と自らが発する内的な動機付けを重んじた授業改善に、この1年間を通して取り組み大きな実践成果を享受できたような気がいたします。



V. 平成19年度 研究授業

英
技
音

語
術
楽



Lesson Plan 英語科學習指導案

School: Yotsuya Junior High School

Principal: TANAI Akio

Teachers: TSUJI Mana, SCOTT Tim, and TANAKA Mari

Date: Monday, May 28th

Time: 5th (6th) period

Objectives: Students will be able to

- develop communication skills
- listen to numbers and recognize how to count numbers
- listen to an alphabet letter and find the initial letter
- write new words including numbers from 0 to 20 in a proper manner

Materials: New Horizon English Course 1 published by Tokyo Shoseki (Word Box Numbers p. 22-23)

Dr. Phonics published by Matsuka Phonics Inc. (Alphabet letters p. 1)

Classroom: 1-D 18 Males 15 Females Total 33

Flow of the Lesson 授業展開

DAY		Students will learn about...	To reach the objective, students must ...	To master each learning point, students will...	Students will learn target phrases, vocabulary and grammar structures, including...
1-7	1) Introduction (alphabet letters) 2) Comprehension 3) Extended Activity	1) how to say alphabet letters 2) how to write 3) phonics	About alphabet letters 1) gain knowledge 2) how to write 3) letter and sound	1) listen to alphabet letters 2) notice pronunciation 3) listen and respond to a phonics sound.	skills and activities: listening, pick up key words, speaking in pairs vocabulary: ant~zebra (text p. 8) apple~zebra (phonix p.1)
2	1)Introduction (vocabulary)	1) how to read and write words 2) how to read and write sentences 3) what to say numbers from 0-20	1) grasp the idea of sentence structure 2) knote target vocabulary	1) choral reading of new words 2) key words and phrases 3) Q&A : speak in pair to answer questions 4) read and write numbers 5) do problems in worksheets	skills and activities: listening, pick out key words, taking notes, speaking, in pairs vocabulary: bus, coffee, cake, cat, dog, hamburger, jacket, juice, milk, etc (p.8)
3,4, 5	1) Comprehension 2) Grammar 3) Exercises	1) phonics and numbers 2) textbook (comprehension) 3) key phrases (grammar) 4) math questions: addition and subtraction	1) recognize what are key words and key phrases 2) learn structure of grammar 3) pick up key words and sentences 4) do easy problems on addition and subtraction	1) choral reading of new words 2) key words and phrases -worksheet -Q&A in pair 3)textbook - notice what are new words - recognize a structure of a target grammar	vocabulary: good morning, I , am , Emi, Ann, Green, I'm, grammar structure: Good morning. I am Emi. classroom English: Good morning, everyone. How are you? Fine, thank you. And you?(p.2)
6	1) Extended activity (card game)	1) phonics sound and how to find a letter card that matches with the sound 2) how to get familiar with the sound of the initial letter of words 3) how to recognize	1) develop skills in saying alphabet letters 2) understand the sound of the initial letter of the word 3) pick up a number in a sentence 4) solve addition and subtraction and find	1) do a group activity with cooperation 2) listen to teachers with concentration 3) understand and acquire how to say phonics and numbers 4) find key word and react to what teacher says with autonomous actions	vocabulary: all new words that they learned till that day grammar structure: all target phrases that they learned till that day classroom English: same as written in above

		a number in a sentence 4) how to do attendance and subtraction 5) how to write numbers from 0-20	answer properly 5) develop penmanship skills 6) write words and know what they mean in Japanese	5) practice how to write new words and numbers over and over	
(7)	1) Extended activity 2 (sharing cultural differences)	1) card game done 2) competition 3) cross cultural experience	1) cooperate with guests 2) grasp the idea of different culture 3) practice many times	1) listen to teachers and do a card game 2) participate competitions actively 3) practice how to say, read, and write numbers	vocabulary: all new words that they learned till that day grammar structure: all target phrases that they learned till that day classroom English: same as written in above

——Lesson Plan 指導案——

TIME minutes	CONTENT 内容	LEARNING POINTS 指導の要点	ACTIVITIES 学習活動 Students will be able to ...
5	Warm up ウォーム・アップ	1) Greetings 2) Gesture Quiz	1) greet each other. listen to Tim and reply to his question. 2) listen to Ms Tanaka and respond in action.
12	Introduction 導入	1) Phonics 2) Numbers	1) do choral reading with Tim. circle the initial letter. 2) say numbers from 0 to 20. practice in pairs.
15	Game ゲーム	1) Card Game	1) listen to Tim and find alphabet letters. listen to Tim and find numbers. compete in a group of students with cooperation.
10	Conclusion まとめ	1) Writings	1) read numbers from 0 to 20 and write them down. read new words and write them down.
3	Closing 挨拶	1) Announcement 2) Greetings	1) listen to teachers for announcement. 2) greet with each other.

Total: 45 minutes

カードゲーム 個人用集計票 サンプル

班	名前	枚数 第1回戦	枚数 第2回戦	枚数 第3回戦	枚数 第4回戦	合計
1	IS	4	7	3	6	20

カードゲーム 個人用集計票

班	名前	枚数 第1回戦	枚数 第2回戦	枚数 第3回戦	枚数 第4回戦	合計
1	IM	6	8	5	10	29

カードゲーム 1 グループ 集計票 サンプル

班	名前	第1回戦 枚数	班	名前	第2回戦 枚数	班	名前	第3回戦 枚数	班	名前	第4回戦 枚数
1	I S	4	1	赤間							
1	I M	6	2								
1	O	8	3								
1	A G	9	4								
1	A M	1 3	5								
1	W H	1 2	6								

< 研究協議会 >

1. 参加者

本校教諭・講師（本庄 文男先生）・PTA役員・スクールコーディネーター

2. 授業者より

コミュニケーション能力の向上を目指す英語教育という視点から、本科のチーム・ティ칭ング授業を設定をした。語彙指導においては、フォニックスを利用した教科指導の一つの例として、アルファベットや数字を利用したカードゲームを通し、ペア・ワークやグループ・ワークなどの授業形態を取り入れることで、4技能を駆使させる工夫を施す。生徒は、指示に対して予想以上に臨機応変に対応し、積極的に活動することができた。

3. 質疑応答

- 動きのある授業で、子どもが生き生きしていた。
- ALTとJETの連携が円滑であり、発問や発話の比重が均等であった。
- 日本人は初対面と話すのが苦手なので、コミュニケーション能力の向上を目指すという目標設定は、とても大切なことである。
- コミュニケーションの練習ということで、場面の切り替えではテンポ良く移行させていた。
- 失敗しても大丈夫という環境設定や、外国の雰囲気を伝えることが課題。
- 子供たちがゲームに集中し、楽しんで活動を行っていた。
- アルファベット文字や絵など、視覚的指示が参考となった。
- 英語指導における反復練習などは、参考になるが、その定着度をどのように評価するのが課題である。
- 子供たちの反応が一人一人違い、その差がみえてくる授業であった。関心意欲が異なる子供たちの、表現力をどう伸ばすのが課題である。

4. 講師より

よかった点

- 生徒は英語を通して活動し、達成感があつた。
- 最後の課題(英字新聞の抜粋)は、さまざまなレベルの生徒に対応している。
- つづり(スペル)をとнаえて単語を覚えさせていた。
- カードゲームは、意欲関心を引き出す。
- 個人戦だけでなく、グループや班活動もあつた。

改善点

- 班でピア・ティーチングを取り入れたい。
- 定着については、単元毎の添削の時間にテストを行うことができる。
- writing が苦手な生徒に対する書き方の指導を、もう少し丁寧に行う必要がある。
- 音声や文字情報だけでなく、視覚情報(画像や映像)も取り入れる。
- 先生発信型の質問だけでなく、生徒発信型の場面も必要である。
- 制限時間を知らせる際は、ホイッスルではなく、キッチンタイマーを使う方が心地よい。



技術科 学習指導案

平成 19 年 6 月 18 日

授業者 小林 伸一

1. 単元名／題材名

コンピュータの利用／処理した情報をまとめよう

2. 単元／題材のねらい

- ・文書処理、図形処理などソフトウェアの種類や特徴、利用方法などを理解できる。
- ・ソフトウェアを用いて、情報を処理するための手順について考えることができる。
- ・目的に応じたソフトウェアを選択し、目的とする処理を行うことができる。

3. 学級 1 年 B 組 男子 19 名 女子 14 名 計 33 名

4. 指導計画

- ・情報と私たちの生活 1 時間
- ・コンピュータの仕組みと基本操作 1 時間
- ・コンピュータの利用 1 2 時間（今回の授業は 8 時間目）

5. 本時のねらい（新聞づくり 2 時間目）

◎移動教室を終え生徒一人ひとりが手書きで新聞を作成した。レイアウトや飾り等自由に書かせた新聞と同様もしくはそれ以上のものをコンピュータで作成出来ることを理解する。

（前回：文書作成ソフトを用い、新聞の作成・保存を行った。生徒全員未完成である。）

- ・デジタルカメラで自分の写真を撮影し、DVD-RWに保存できる。
- ・新聞に写真を貼り付けることができ、訴求力のある新聞を作ることができる。
- ・新聞が未完成でも授業の最後までに印刷することができる。

◎次回は保護者や地域の方が授業のサポートをしてくださる予定なので、今回は本校独自のやり方である印刷・保存を中心に指導を行い、文書作成ソフトの使用法の指導は次回に行う。

6. 本時の展開

過程	学 習 活 動	☆ 指導上の留意点 ◇ 評価
導入	・本時の作業の流れを説明。 ・デジタルカメラで自分を撮影。	☆作業に関する質問は、原則受け付けないことを改めて説明する。 ◇関心：話をしっかり聞ける。作業内容がわかる。 ◇技能：カメラの操作がわかる。 ◇知識：著作権・肖像権を理解できる。

展開 1	・撮った写真をDVD-RWにコピーする。 ・取った写真を新聞に貼り付ける。 ・引き続き新聞の製作。	☆一度だけ作業をしているので、操作方法を忘れた生徒は、自ら試行錯誤しながら作業が出来るよう援助する。 ◇工夫：訴求力のある新聞を作ることが出来る。 ◇技能：DVD-RWにコピーできる。写真を新聞に貼り付ける。 ◇知識：文書作成ソフトの様々な機能が利用できる。
展開 2	・新聞を保存、印刷 ・作業が終わった生徒はタイピング練習	☆今回は印刷することに重きを置いているので、作業が途中でも印刷させる。 ◇知識：印刷方法が理解できる。 ◇関心：残り時間を積極的にタイピングに取り組むことが出来る。
まとめ	・本時を振り返って	☆しっかり作業できたか確認させる。完成させられなかった生徒には、なぜ出来なかったか考えさせる。プリントに記入させる。

7. 作品例



研究協議

1, 授業者より 小林 伸一教諭

目標を明確にし、時間内で処理できるように工夫した。

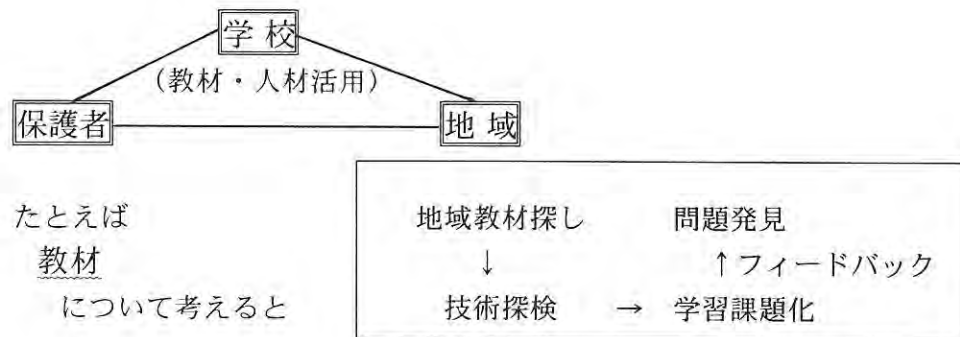
2, 講演会 元 横浜国立大学教授 中村祐治先生

・技術家庭は、一番生活に近い、身近な教科である。

・2つの協働があり、

1、共通分担 2、機能分担

それぞれに3つの分担がある。



・では、学校教育とは、

家ではできない

カリキュラムの工夫

地域ではできない

もので

生活に役立つ学習（家で使える）が必要

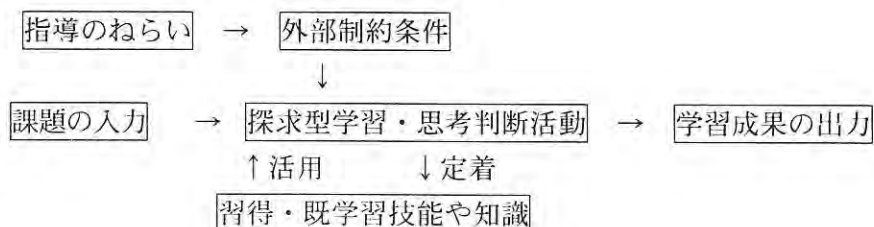
塾・〇〇教室ではできない

協働が伝わる通知表の工夫

・学校教育での学びは、4観点を育てる学び、系統的・意図的学びである。

ウィニー問題がなぜ起こったのかを考えると、操作の手順、意味、その科学的理解、工夫と創造、関心・意欲・態度が大切であるのに操作学習にのみ重点を置いた結果ではないだろうか。

・実際の授業は、図解すると



・指導のねらいや制約条件から生徒たちは自らの課題を知り、何を使うべきかの選択力を養い、既習技能・知識を使って思考、工夫し創造する力を付けていく。

・そのため、教師は

3年間を見通した指導計画 支援資料の作成

振り返りを大切に（学習の連続性、定着、評価機能の統合化）

4観点を育てる働きかけの工夫（例えば声かけの仕方）

をしなければならない。

3、質疑応答

Q：レクチャー型でなく、生徒の活動を多く取り入れたいと思っているが？

A：生徒の集中力は、そう長くはない。大いに、活動を取り入れてほしい。

Q：体育科では、導入部に観点のポイントが集中するのだが？

A：まとめ部分でも導入と同じ内容の質問をして、フィードバックをするとよい。



音楽科 学習指導案

第3学年
授業者：伊藤憲弘

1. 題材名

「豊に響く声を探そう」

2. 題材のねらい

豊かな声とは、声が朗々と響くことである。指導者が模範唱することによって、生徒に「豊かな声」を感じ取らせるととをねらいとしている。特に、日本語を歌に乗せることは大変難しく、語気、アクセント、ニュアンス、表情に気を配ることが大切となる。教材の「いざたて戦人よ」は、アカペラ混声四部合唱の作品で、ユニゾン部分、強弱や速度の変化、主要三和音を中心とした感じ取りやすい和音等、発声・発音を意識させながらより良い響きを探求する活動として適していると考え設定した。

3. 研究主題との関連

主題の「都市型コミュニティ構想に向けての学校のあり方」に関連させ、音楽科は、各領域から①合唱表現②和楽器指導③創作表現を挙げ、地域の人材を活用することで、地域の児童生徒を中・長期に渡り計画的に育成することに繋げたい。
世代を超えて共に表現できる合唱や専門家による和楽器指導、地域を題材とした歌劇の創作や表現など、地域と学校が活動のねらいや課題を共有し、展開する視点が大切であると考えた。

4. 指導計画

- 第一次：CDによる模範唱を聴き作品のイメージを膨らませる
- 第二次：ONTAを使用したパート練習
- 第三次：発声・発音の確認（本時）
- 第四次：響きのあるハーモニーを探求する

5. 本時のねらい

日本語の母音・無声音・子音・鼻濁音等の発音に気をつけさせ、全体をバランス良く発音する練習をねらいとする。

6. 本時の展開

過程	学 習 活 動	☆ 指導上の留意点 ◇ 評価
導 入	○本時の説明＜指導者紹介＞ ○既習曲を活用したハーモニーの確認をする	☆姿勢、口の開け方等の確認 ◇説明を理解しているか（生徒の動き）
展 開	パート別練習 体育館の四隅に各パート別に分かれて練習する 「いざたて戦人よ」 藤井泰一郎 作詞 グラナハム 作曲	専門指導 S：多田京子 MS：井坂 恵 T：西岡慎介 B：多田康芳 ☆各種発音を意識させる 母音・無声音・子音・鼻濁音等 ◇指導者の模範唱を参考にしながら工夫して練習しているか ◇豊かに響く声を探しながら練習しているか
ま と め	各クラス発表 講評	◇学習を生かした歌い方を工夫しているか ◇響きを感じ取って歌っているか

図 1

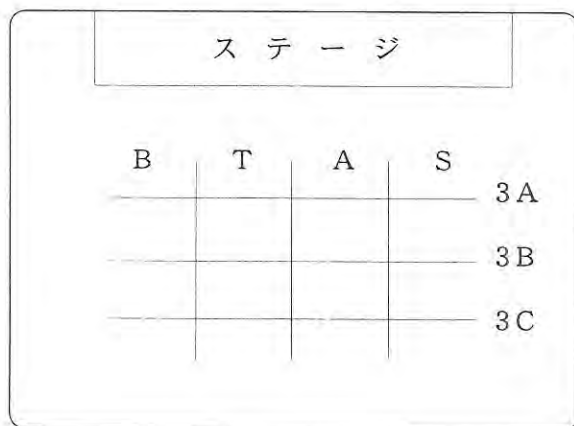


図 2

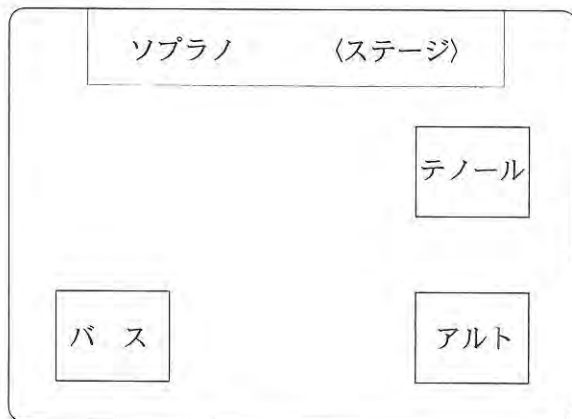
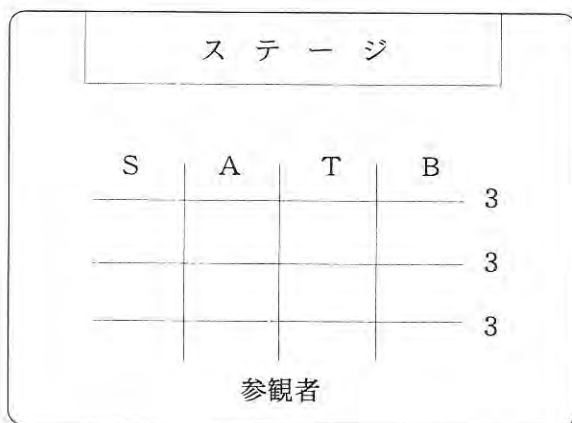


図 3



5校時終了後

①体育館履き

②筆記用具

③マイソング

体育館履きを持って体育館ステージに向い集合（図1）

※パートリーダーの指示に従う

導 入

〈チェックポイント〉

姿勢・正しい音程・響き

★声だし終了後、指示に従い各パートに分かれ練習開始

★参観者も各パートに分かれ練習に参加して下さい

展 開

〈チェックポイント〉

①子音：重くならない程度

②「ウ」の段、口の奥とオに近い
感じでの発音

③鼻濁音

ま と め

①集合時とは別に、体育館出入り
口に向い整列（図3）

②クラス発表（1番のみ）

〈チェックポイント〉

①ソプラノ・テノールの高音

②アルト・バスの低い音の音程

③各パートのバランス

④発音

★指導者よりの講評

研究協議会

1. 授業者より

今回の授業は、声楽家であるその道のプロの皆様と、中学校音楽科のプロが合体し、力を合わせて生徒の音楽的能力をどこまで引き出せるかの授業でした。

四谷中の生徒をそれぞれの立場で両者が共有し専門的に関与することは、生徒の音楽的な面の伸長に大きく影響することは確かだと思えます。今後3年間で、10回程度継続して進める予定を考えています。何年か先に、ヘンデルの「メサイア」を地域の力も含めて演奏できたら面白いと思います。

小中連絡協議会を始めて7年が経つが、現在の3年生が、小学校音楽科の先生方と共通の理解を持って育ててきた最後の学年です。小・中連携の意義を充分感じ取れる期間でした。2学期以降、小学校の授業に出向いて新たな連携を図り、再構築する時期と考えています。

2. 感想

<飯塚>

人間の向上心は、人と比べるところから始まる。今日は、友人と比べ、プロの方と比べ、実りある向上心が生まれたのではないか。

<多田A：ソプラノ>

自分の中学時代を振り返ると、「歌」は一番苦手な分野であるはずだが、思春期に入る前からの積み重ねがあって、今日の彼らの歌声があるのだと分かりました。生徒の方から質問もあり指導が進めやすかった。1・2年生や、これから入学する生徒もこのように歌って欲しい。

<井坂：メゾソプラノ>

最初の歌は、伊藤先生の指示によって弾き出されているように思ったが、実際指導を始めると、関心が非常に強くこちらが乗せられてしまった。競うという気持ちより、楽しもうという気持ちが伝わってきた。

<多田B：バリトン>

30分という短い時間にもかかわらず、レスポンスが非常に早く、確実にパワーアップした歌声に変わることが実際出来た。伝わるが多かったからこそ時間がもっと欲しかった。また機会があるならば、よりステップアップした内容が考えられる。歌のレパートリーの多さも素晴らしい。

3. 質疑応答

柳ヶ瀬：身障学級の生徒にも本物を与えたい。生徒とつながり出来るかどうかよりも具体的に子供たちの心を掴むことの大切さを感じた。

伴 場：合唱コンクールを控え、子供たち自身がとても楽しみにしていた。レベルの高い内容で有り難かった。合唱コンクール前になると、特にソプラノの生徒などが声を痛めてしまう。どうすればよいか？

口を開けすぎない。指2本縦に入るくらい、口の中をあくびのように開けておく

森 田：良い合唱を創りあげたいと思うのだが、良い合唱とは？

- ①楽譜通り、ベーシックに全て出来ること
- ②言葉の意味を伝える歌い方（どのように発音するか）
- ③fよりpの部分でうまさが出る
- ④情景を思い浮かべながら歌えたら理想的だが、自分がどう表現したいか、どのようにイメージしながら歌うか、それが作品に合っていくと良い。

長 崎：今日のように教育者としての指導者と専門家が合体した授業では、評価をどのようにすればよいか。また、今後このような形態が増えると考えるが、システムをどのように作っていけばよいのか。

地域の人材活用は、こちらからアプローチしなければ成立しない。何をどのようにすることで生徒の良さを引き出すかの計画をもって指導する。生徒を両者が共有し、その時ごとに記録を取り次につなげる。

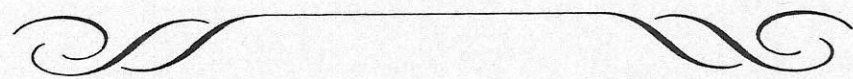
酒 井（スクールコーディネーター）：感想

今日は、花園小の保護者とその仲間の方を招いた。余裕をもってより適切な人材を捜していきたい。そのためにも、事前の計画、その時間の評価については是非知りたい。単に、子供たちが関心をもって取り組んだというだけで良いはずはない。短時間ではあるが、子供たちの変容が実感できて良かった。

4. まとめ

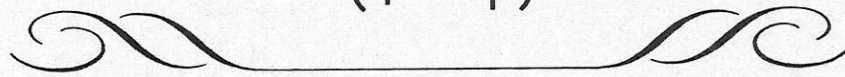
指導案にもある通り、授業者が最初に課題を示し、生徒がそれに応える形でプロの指導を受けた。そのことによって成果が表れていた。授業者には、明確な課題設定能力が求められる。さらに、それ以降の授業でその内容を反芻していくことが大切であり、専門家のスキル、また、指導者間でそれぞれの指導方法を生かし合っていくことが大切である。





VI. 地域の人材・教材研究部会

(1 年)

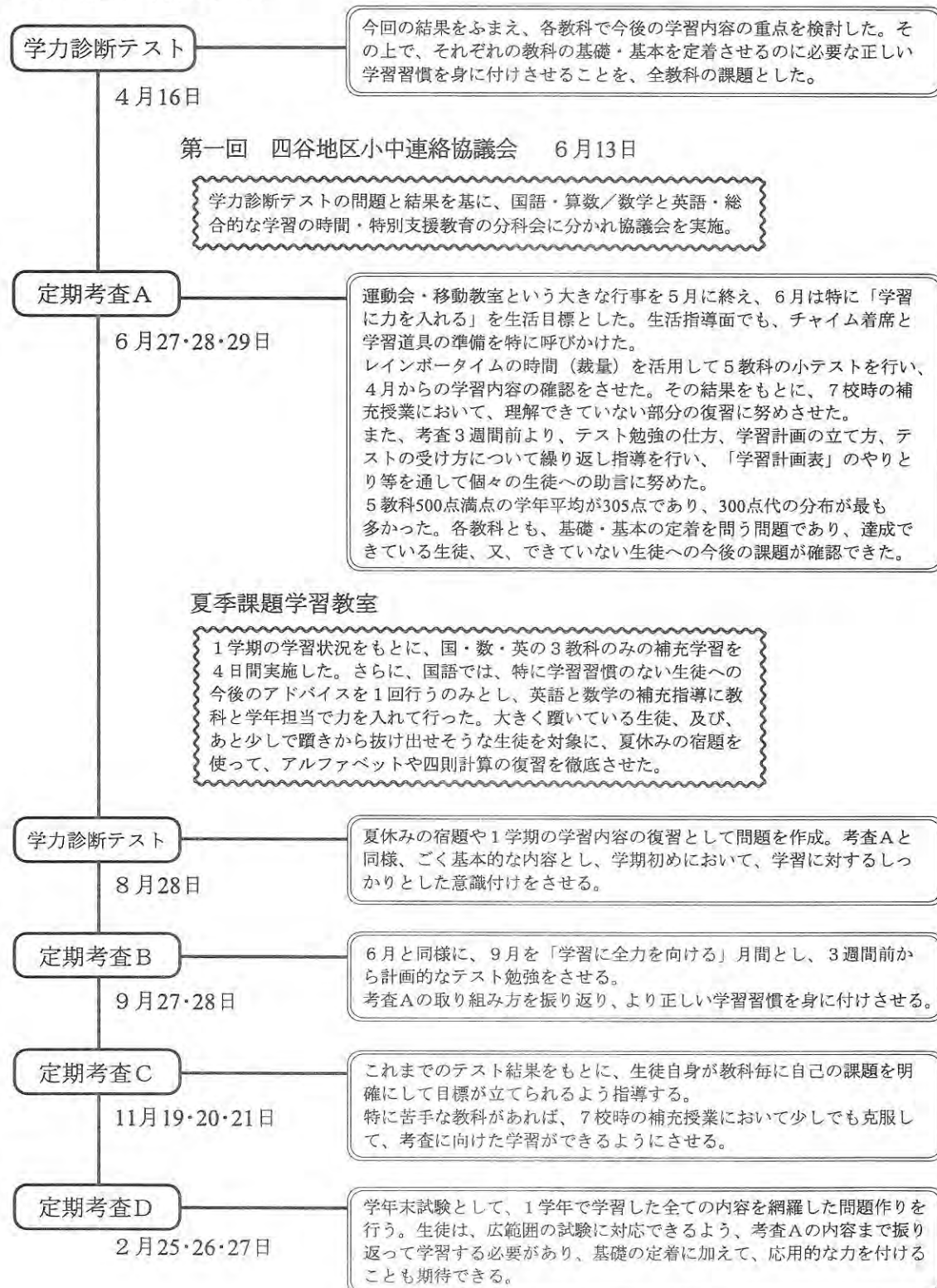


平成19年度 学力推進年間計画

小学校までの学習では、勉強習慣や理解力の違いによって「勉強ができるか、できないか」に分かれ、中学校の教科担任制のもとでそれぞれの専門性に応じた学習をするようになって、「得意な教科」「不得意な教科」が表れてくるのではないだろうか。

昨年度から年度当初に学力診断を実施するようになって2年目になる。生徒一人一人の学力についての確につかむことにより、生徒の実態に合わせた各教科の円滑な年間計画実施が可能になった。

今回の結果をみると、小学校段階の3段階評定で「国・社・算・理」4教科の合計が11以上の生徒は、400点満点中300点以上に達していた。しかし、合計8の生徒をみると、110点から290点代まで幅広く分布している。学力向上に向けた年間計画の必要性を痛感し、設定されている定期テスト等を軸に、個に応じた取り組みを進めていくこととし、下記のように計画し、実施している。

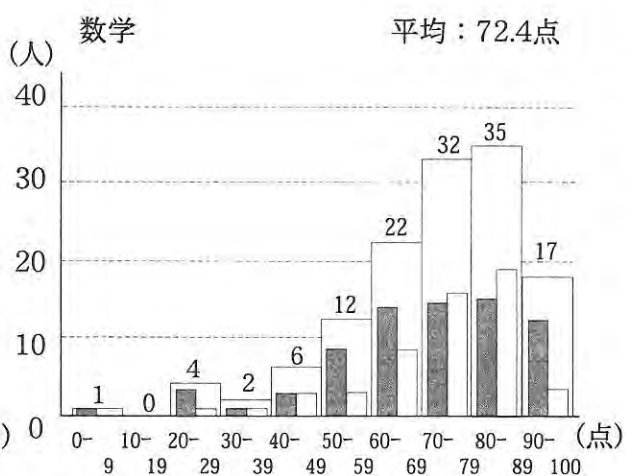
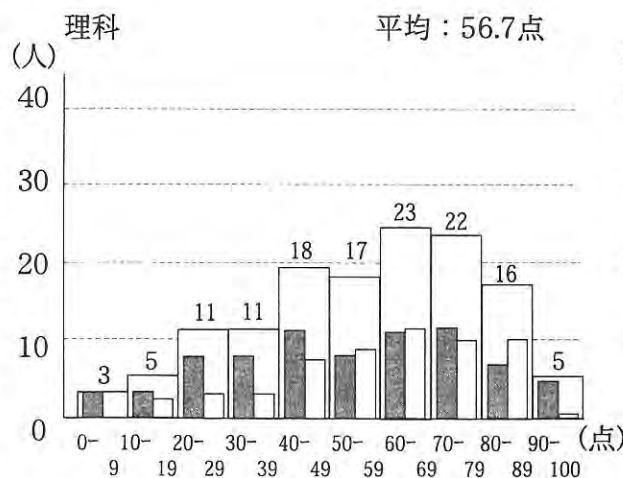
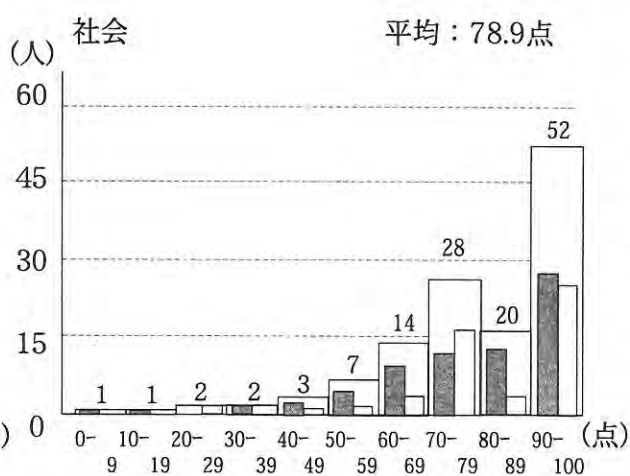
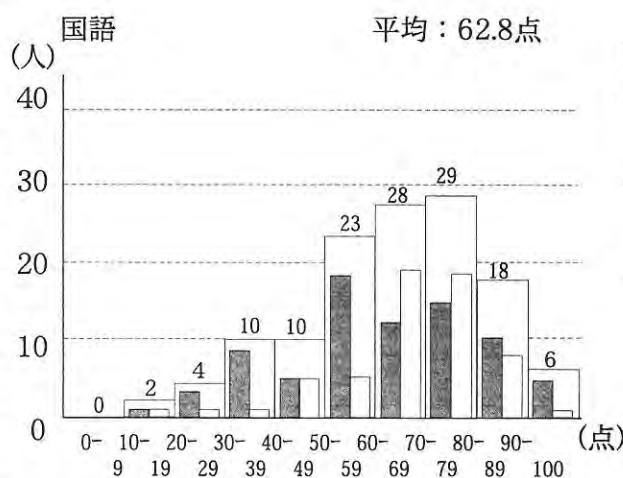
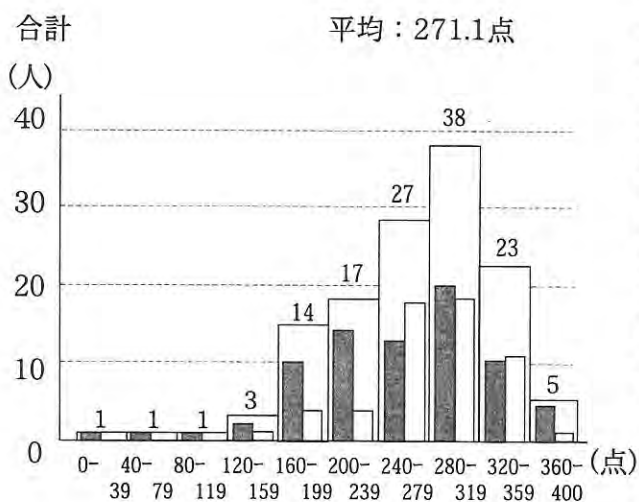


平成19年度 学力診断度数分布表

【学力診断】

	国語	社会	数学	理科	合計
得点	78	88	81	58	305
平均点	62.8	78.9	72.4	56.7	271.1

教科別得点分布グラフ



平成19年度 学力診断結果分析

	試験の結果について	今後の学習の仕方
国語	〈漢字〉20点満点 16点以上の者 学年の3割弱 10点未満の者 学年の3割強 出題は小学校5・6年程度の読み書きです。	授業で毎時間「漢字学習プリント」をやります。毎回10問、こつこつと練習して下さい。 興味・関心の高い人は、漢字検定（5・4級程度）を目指して学習を進めるのもよいでしょう。
	〈言語に関する知識〉漢字を含めて、50点満点 40点以上の者 学年の17% 25点未満の者 学年の25% 敬語や語句の使い方（ことわざもふくむ）など出題しました。	まずは、上記の「漢字プリント」を活用して、語句をしっかりと身に付けましょう。 また、教科書の作品の意味調べを丁寧にし、辞書を使う習慣を付けましょう。
	〈読解〉44点満点 35点以上の者 学年の3割弱 22点未満の者 学年の18% 小説の一部から二題出しました。ごく短い文章で、設問もたいへん易いものでした。	今後は、授業で学習する小説文や説明文をしっかりと読み込みましょう。 今回のテスト内容で22点未満は、心配があります。朝学習や補充学習を通して、読む訓練をしていきましょう。
	〈聞く力〉6点満点 読み上げる文章を聞き取り、正しいものを答える問題でしたが、二問とも正解したのは、学年の半分に満たない人数でした。	日頃から、何事も注意深く聞く力は、大切です。 また、聞いて理解する力は「聞く」ことだけでなく、文章を読むことでも、高められます。読解力と同様に、読書に励みましょう。
社会	解答欄に選択肢をつけたので、よく出来ていました。誤答が多かったのは、地理的分野で、京都と奈良の位置の違い、歴史的分野で、平安時代と室町時代を逆にしている間違いが多くみられました。記述式では、「輸出」を「輸出」とする誤記、「相手国とつりあいをする」等表現としておかしいものもありました。注意を払って下さい。	授業中の集中力、「覚えるぞ」「考えてみよう」という意欲が大切です。授業の始めに学習した国名が、授業の後半で確認すると答えられない、ということが多々あります。集中力、意欲を高めて授業にのぞむようにしてください。
数学	計算問題は34点中、27点以上(8割)の人が90人以上いました。小学校で良く学習していることがわかります。ただし、27点にいなかった人はこれからついていくのがたいへんだと思います。早めに中学校の授業の予習、復習をしておかなければなりません。 知識を問う問題は33点中、26点以上(8割)の人が55人でした。約数倍数は良く理解していましたが後は、確実に理解していないところが少しずつ見られました。 見方、考え方を問う問題は、得点の低いところです。数学の計算力と、知識と、応用力を全て合わせたものになります。33点中、26点以上(8割)の人が28人、16点から25点が(5割から8割)80人でした。	計算力は全ての基本です。小学校の復習をするのは1学期が一番です。せめて夏休み中までにきちんと計算の基本を身につけてください。中学校3年間をしっかりと過すためには最初が肝心です。 数学で知識を問う場合、大体このぐらいと言うことはありません。正確に覚えることがたいせつです。 見方、考え方を問う問題の中では、比例は中学校で2学期にやる大事な部分です。中2中3に繋がる所で2つの関係を式や表やグラフで表すということを身につけてはいけません。又、他の分野でも今まで学んだことを使って自分で考えることが求められます。普段から問題集を進んで解いたり、なぜそうなるのか考えたり、他の方法は無いのかを考えることが大切です。その努力ができる人が力を伸ばします。
理科	各問題別の正答率は、 1. 植物分野（花のつくり）は57.5%、 2. 動物分野（循環系）は53.7%、 3. 化学分野（気体の性質）は78.3%、 4. 地学分野（地層）は70.6%、 5. 物理分野（電気分野）は51.2%、 6. 化学分野（溶解度）は42.4%、 7. 化学分野（水溶液の性質）は32.1%、 でした。また分野ごとの正答率は、 物理分野51.2% 化学分野50.9% 生物分野55.6% 地学分野70.6% でした。 今回間違えた問題は必ずやり直し、今後に備えましょう。	今回の問題は、開設の時にも話しましたが、全て1年・2年の理科の授業で必ず出てくる内容です。今回の試験結果は気にすることはありませんが、中学生として、今後1回1回の授業を大切にするようにしましょう。 授業を大切にポイント、 ①授業の主役になること(1回の学習内容は2度と行いません。Qなどの問題はよく考えしっかり自分の答えを書くこと、話しを良く聴くこと、分からないことは必ず教科担当に聴くこと)。 ②宿題を絶対忘れないこと。 ③復習を必ずすること(その日に習った内容は必ずその日の内に覚える!)。 を必ず実践してください。

〈今後の自己学習の重点〉

小中連絡協議会会議録

平成13年度より、教科指導を中心とした小中連絡協議会が実施され今日に至っている。
小中の各教科における連続性や系統性を研究する協議会です。以下は、今年度の連絡協議会
会議録の協議内容を抜粋したものです。

《国語科 分科会》 小中それぞれの学習の仕方、工夫点など

○ はじめに

今年の1年生は、「書く」ことがしっかりできる生徒が多い。ノートのとり方を見ても、ていねいに書いたり、分かりやすくまとめたりすることができている。年度によって、発表やスピーチが非常に上手な学年、書くことがとても苦手な学年などあるように感じられるが、小学校での指導の重点の置き方が変わっていたりするのだろうか。

また、指導する上で、今困っているのはどのようなことか。

1, 漢字について

- ・小学校では、3年生頃から新出漢字が非常に多くなり、単元の中で扱うのがとても難しい。
- ・単元の学習とは別に、毎日時間を取って繰り返し練習させている。
- ・まとめて新出漢字だけを学習させているが、時間がかかる。
- ・作文など日常使うときに指導している。
- ・中学校では、毎時間の取り組みとともに、毎週テストするなど力がつくよう工夫している。
- ・昨年の1年生では、7校時の授業で漢字 100 題テストを行い、合格するまで取り組ませた。

2, 読む力について

- ・以前に比べると、読解にかかる時間が少なくなっている。
- ・教科書の中に、「調べてみよう。」「発表しよう。」などの内容ばかりが増え、じっくり読ませるものがない。
- ・投げ込み教材として、教科書とは別に用意して、物語など読ませている。
- ・中学校でも、教材のレベルが落ちている。読解力をつけるのにふさわしい教材が減っている。読み応えのあるものを読ませたい。

3, 説明的文章での要点のまとめ方について

- ・段落をまとめるのに、非常に時間がかかり、それだけで何時間も授業が取られてしまう。
- ・低学年では、まとめ方だけを教えるようにしている。または、やりやすいところだけをまとめさせたりする。
- ・ワークシートを準備して、穴埋めさせることが多い。
- ・高学年では、大事な一文だけを探させたり、不必要な言葉を削らせたり、などの方法を教え、自分でやらせてみている。模範例と異なっているけど、必要な言葉が入っていればよし、自分の書いたものを大事にさせるようにしている。
- ・中学校の教科書では、説明文でも指導に適したものが減っている。段落構成を学ばせるのに理解しやすい教材を選んで教えたり、まとめさせたりしている。

4、音読について

- ・低学年の授業では、必ず、全員での音読を行っている。
- ・なるべく音読をさせたいと思い、詩集を与えて読ませたりしている。中学校ではどうか。
- ・中学校では、詩の暗唱や、小説の朗読などをよくさせている。声に出して味わうことは、大切にさせたい。
- ・古典作品の暗誦は、必ず行っている。

《算数・数学科 分科会》 各校の現状や感想など

① A中

- ・今回の授業では、小学校で学んできている四則計算に負の数の入ったものを扱った。
- ・中学校では、全体授業重視だが、生徒は、個々に見てほしがる。(T・Tの活用)
- ・ノートをよくとり、わかるまで考える子、ねばり強い子が伸びる。
- ・4月の学力テストでは、計算、倍数などよくできていた。比 でやや間違いがあった。
- ・得点が低い生徒が各クラス4～5人必ずいる。7校時の授業などで対応。
- ・中学生は多感な時期なので、習熟度別の少人数でレッテルを貼られるとやる気をなくすなど、あまりうまくいかない。

② B小

- ・学力習熟度別で進めている。6年生では、2クラスを3組に分けて、少人数授業をしている。1番下は、6人程度、九九から。中が14人。上が20人。
- ・ゆっくりコースは、T1とT2がつく授業をしている。
- ・下のクラスの子どもは、じっくりやればわかるようになることが多い。
- ・到達度の低い子どもには、個別に対応している。
- ・6年生の時点で、計算力はしっかりつけておき、その上で考える力を高める学習をたくさん取り入れていた。
- ・計算問題ができれば、思考する学習も深められるのではないかと思う。
- ・中学校の授業の展開の速さを見て驚いた。ノートをとる量も多い。能力差はどうなのか。到達度の低い子どもは、ついて行けるのか。
- ・中学校の学習は理論が多いので、先生の話も細くなるのかもしれない。
- ・中学校の内容は、小学校の延長。小学校でしっかり定着しなければいけない。
- ・小学校では、中学校のようなカリキュラムを作るのは難しい。
- ・小学校で学力を高めれば、中学での学力を伸ばすのにも効果的。
- ・小中連携を早急に進めてほしい。

③ A中ふれあいサポーター

- ・小中連携は、地域の日からみても、よい成果を出してほしいと期待している。

④ C小

- ・今年の中学1年生は、2クラスを習熟度別で3組に分けて学習していた。分かるまで考える子どもが多かった。

- ・今年度は、各学年1クラスを、単元によってT・Tにしたり、均等2クラス、または習熟度別に分けて少人数授業を進めている。
- ・各学年での学習をしっかりと定着させることが重要だと感じている。
- ・小学校と中学校の授業の仕方の違いに驚いた。

⑤ D小

- ・1・2年生では8割の時間、T・Tか少人数で授業している。4・5・6年生は担任のみで授業している。
- ・数学は、合理的に考えていく学習で、覚えることは簡単にできる。
- ・導入で、よく考える授業を工夫している。

⑥ A中 理科

- ・中学校では、高校受験を意識すると、展開も早く進めなければならない状況にある。
- ・なるべく考える授業を増やしたい。
- ・漢字で書くことなど、国語の力も非常に重要。
- ・到達度の差が激しい。学習の遅れている生徒へは、7校時などに指導。学習の進んでいる生徒への対応は特にないが、授業の中で、高校レベルの内容も取り入れている。

《特別支援教育 分科会》

1, はじめに 四谷中 谷合校長より

一人一人のニーズに応じた教育が、今、求められている。互いに情報交換して、各校の一助にしてもらいたい。

2, 特別支援教育について各校の取り組みの状況

① A中学校

- ・「特別支援教育委員会」を組織
- ・4/17 校内研修会で気になる生徒の情報交換
- 4/19 特別教育支援推進員を決定
- 5/11 推進員との意見交換

各学年で生徒との面談をし、分担して対応している。

② B小学校

- ・5/31 生活指導全体会、気になる子どもの情報交換
- ・推進員が週2回来校。決定後、保護者の承諾を得る(3名)
- ・SC(区のカウンセラーと看護師)が2名、週各1回来校。役割分担をして対応している。
- ・生活指導部会と特別支援教育校内委員会は重なっている。
- ・資料作りを行っている。

③ C小学校

- ・全体計画、校内委員会などは整えたが、まだ、機能していない。
- ・推進員、学生ボランティアは来ていない。

- ・ 6 / 6 全体会で気になる子どもについて話し合い、巡回相談の対象とする児童をしぼった。

④ D小学校

- ・ 昨年から教育相談が校内委員会をもっている。
- ・ 学力低下で支援の必要な子どもがいる。昨年から、洗い出しをしている。
- ・ 推進員来校。対象児 1 名。保護者の理解有り。
- ・ 5 / 27 生活指導全体会をもって、配慮を要する子どもの情報交換を行った。

※ 専門家チームの巡回について

年間 3 回、3 時間。何を見てもらうか、予め絞っておいて相談する。

※ 特別教育推進員の派遣について

区で 20 名。学期ごとの派遣となっている。

3. 現状についての感想など

- ・ 不確実な部分が多くて進めにくい、情報交換をしながら確実なものにしていきたい。
- ・ それぞれの子どもに合ったニーズに応えていきたい。
- ・ 都教育相談センターの派遣も活用できる。
- ・ 専門家からのアドバイスを現場がどう活かしていけるかが大切。
- ・ 保護者も、子どもにどう関わっていけばよいか分からなくなっている。
- ・ 親へのケアも必要になっている。
- ・ ふれあいサポーターに会うと、近づいてきて、さわる子どもが増えてきている。
- ・ 子どもたちがふれあいを求めていると感じる。1 対 1 で教えてほしいと願う子どもが多い。
- ・ 中学生が、年々、幼さを感じる。
- ・ 生徒の人数が増えるとトラブルも増える。悪口を言ったり、いたずらをする事でコミュニケーションをとっている。「死ね!」「うざい!」等の発言も非常に多い。
- ・ 中学 2 年生になって、初めてクラス替えをして、慣れるのに時間がかかる子ども多い。
- ・ 特別支援学級では、一人一人がそれぞれの世界をもっていて、バラバラである。互いのかかわりをどうもたせていったらいいのか、難しい。

4. まとめ 谷合校長より

学校として欠落している部分を明らかにして、外部からの的確にアドバイスをもらおうとよい。医療、臨床心理士などの専門家チームからのアドバイスをもっと増やし、学級担任の専門性を向上させる必要がある。

子どもたちが主体であり、その子どもたちがどのように自分の人生を生きていくか、その面からの支援、援助をしていきたい。

